シリーズ・病院

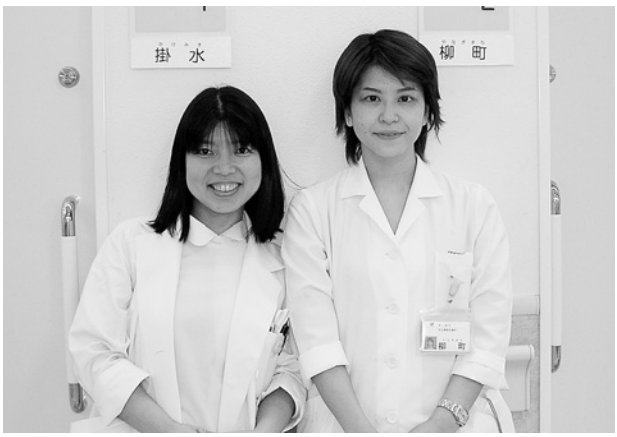
# 茅ヶ崎市立病院

掛水夏恵

茅ヶ崎市立病院は1943年に茅ヶ崎駅近くに町立茅ヶ崎病院として32床で診療を開始し、人口の増加とともに1972年に駅から1.5kmの現在地に290床の病院を新築・移築しました。その後徐々に増床となり、2003年３月には401床からなる新病院を完成させ、現在は茅ヶ崎市・寒川町の住民27万4000人を診療対象人口とし、地域中核病院として急性期医療を担っています。研修医制度の変革、また新病院業務開始とともに、2004年度より研修医採用も始まり毎年４人の研修医が病院の診療スタッフに加わっています。本年度は初めて、２ヶ月間だけですが皮膚科に研修医を迎えることが出来ました。

皮膚科が常勤医２人となったのは2004年からで、これは前任者である小野秀貴先生の功績によるものだと思います。私は2005年４月から小野先生の後任として茅ヶ崎市立病院に赴任となりました。今まで、横浜市立大学医学部附属病院、横浜市立市民病院、横浜市立大学医学部附属市民総合医療センター、横浜南共済病院などで診療してまいりました。各病院で諸先生方に皮膚科診療のいろはから、医師としての役割など色々と教えていただきました。このたび小野先生が退職され開業されるということをお聞きして、出身地であり、両親や姉夫婦が居住している茅ヶ崎市での地域医療の一端を担えればとの思いで、就任させていただくことになりました。

現在茅ヶ崎市立病院では、柳町祐美先生と２人で診療しています。柳町先生はやる気に満ち溢れた若々しい１児の母であり、１年間の非常勤医生活があったことなど、まったく感じさせないしっかりとした診療をしてくれています。女医２人ということで、男性患者さんには気を遣わせていることもあるかもしれませんが明るく毎日診療を行っています。看護師もよく気がつき、スタッフに恵まれたため診療しやすい環境です。この病院でびっくりしたのは、患者さんから「若い先生だねえ。先生になっているのだから30歳は超えているだろうけど……。びっくりしたよ！」と何回か言われたことです。女性としては喜んでいいことなのでしょうが、はっきり面と向かって言われるのは、喜んでいいのか、貫禄がないと嘆くべきなのか?!　皮膚科に入局して間もない頃までは何度か言われたせりふでしたが、ここ５年くらいは言われたことがなく、経験が少し貫禄を生んだかと勘違い?!していた私は、茅ヶ崎の患者さんたちが屈託ないのか、優しい目を持っているのか、どう捉えていいのか迷う日々です。



皮膚科外来前で、常勤医柳町先生（右）と

外来は月曜日から金曜日の午前中まで、午後は手術と光線療法やパッチテストなど予約診療を行っています。入院の定時手術は金曜日の午後に行っているため、金曜日の午後は手術室に大体こもっています。通常診療に必要なデルマレイ、デルマトスコピー等はそろっていますが、レーザー等は予算と美容に手が回らないこともあり、ありません。一般的な診療を大体は行っていますが、形成外科、血液内科、リウマチ内科などが無いため、必要な場合は、患者さんのご希望を伺い、東海大学医学部附属病院や、

藤沢市民病院形成外科、北里病院や横浜市立大学医学部附属病院や同市民総合医療センター等へご紹介も行っています。

茅ヶ崎は温暖な気候で非常に住みやすい場所で、病院は駅から離れているためかちょっと草花の多いところにあります。蜂刺され、虫刺されの患者さんの多い病院です。病院は2004年築ということもあり新しく皮膚科外来も採光もよく明るい場所で、皮疹をゆっくりとみせていただけます。これからも今まで通り、このよい環境を活かして、地域医療のために頑張っていきたいと思っておりますので周辺の開業医、医療機関の先生方、及び横浜市大、東海大の先生方を始めとする皆様方のご支援、ご協力、よろしくお願い申し上げます。

# 平塚市民病院

木花いづみ

平塚市民病院は、昭和43年、それまで平塚市と周辺８町村による組合立の中南国保病院が解散となり、経営主体が平塚市に移ったことをうけて誕生しました。皮膚科はながらく、週２回警友病院や済生会横浜市南部病院などからパートにきていただき、泌尿器科の先生方にも協力いただきながら何とか病院の皮膚科としての業務をこなしてきていました。平成３年に500床に増床になるのをきっかけに、何とか皮膚科にも常勤医の派遣をという話が病院側から慶応大学の医局にあり、地元出身の筆者が希望して赴任させていただきました。古い方の病棟は築20年以上すぎており老朽化が目立ちますが、晴れた日には丹沢の山並みや、空気が澄んでいる日には富士山もよくみえ、患者さんたちや職員の目を和ませてくれます。

現在でこそ、常勤医３名と週２回非常勤の先生にきていただいて公立病院の皮膚科としてはマンパワーに恵まれているほうかも知れませんが、筆者が赴任した当初は医者は１人で、外来の看護師もパートの方が１人だけ配属になっただけ、赴任初日は外来に届いていた機械類を箱からだして設置することから始まりました。はじめは外来患者も１日40人足らず、入院も３～４人程度で、ひたすら午前外来、午後病棟、「もうやめたい（忙しい、安い、遠い）」と言われるパートの先生に頼み込んでしばらくきていただき、その日の午後に手術という日々が続きましたが、数カ月後、現在は埼玉医科大学総合医療センターに勤務されている寺木先生が赴任してくださり助かりました。平成７年からは３人体制になり現在は筆者（木花）、森、大内と全員女性（全員妻帯者ならぬ夫帯者）のチームです。駆け出しのころとちがって現在では外来患者は１日平均110人、入院患者は10人前後、多いときは16～17人、年間の生検・手術件数も500件前後。周囲の開業の先生方からも多くの紹介をいただき、地域の中核病院の皮膚科として多少は面目を果たせるようになったかなと思っております。対象となる患者さんも赤ちゃんからお年寄りまで、疾患も足白癬から悪性腫瘍までほとんどの皮膚疾患を扱うことになります。医者の移動が比較的少ないため患者さんの定着がよいのか10年以上通院している方もかなりいらして、結果大学病院ではあまり経験できない患者さんとの長いお付き合いが避けてとおれません。

病院入り口より病院を望む

筆者は今年で赴任して15年目で皮膚科医としてのほとんどをこの病院で過ごし、育てていただいたといっても過言ではありません。50歳を目前にして当

左より大内、木花、森

直（ちなみに当院では皮膚科は内科系で当直も内科当直をしています）や、昼休みもまともに取れない勤務医生活はだんだんしんどくなってきましたが、もう暫く若い先生方とがんばって勉強したいと思っております。皮膚科の研修病院の指導医として、また総合病院の皮膚科の部長として次のようなことを考えております。

◎ 仕事を続ける女医さんを育てたい
そのお手伝いをしたい

いまや医学部の女性の割合は30%以上、皮膚科医はおそらく半数以上と思われます。しかし自分の周囲を見渡すと出産を機に休職、退職される方が非常に多く残念です。今でも勤務医不足なのにこのままでは将来病院の皮膚科を支えていけないのではないかと心配です。今のところはいっしょに仕事をしている方たちが、家庭と仕事が両立していけるよう気配りしたり、助言したりする程度しかできませんが、今後は妊娠中のトラブル、産休・育休の間の応援体制のようなものを医局や女医さん仲間でつくっていければと思っています。

◎ 皮膚科専門スタッフの育成

皮膚科の入院患者さんの治療にあたっては、入浴の指導、外用介助、夜間のかゆみに対する対応など看護師の協力によるところが、非常に大きいと考えています。しかしながら、先日看護学校の講義を久しぶりにして分かったのですが、皮膚科疾患の授業は本当に少なくなっています。疾患についてある程度の理解があってこそ的確な看護ができるのではないかと思い、まずは病棟回診時にその日の回診についてくれた看護師と患者さん一人一人について現在の状況、今後の方針、診療・看護上の問題点を話し合うとともに、疾患についてのミニレクチャー的なものを始めました。みんな非常に熱心に耳を傾けてくれており、今後の成果が楽しみです。

以上、半分は筆者の感想文のようになってしまいましたが、今後も周囲の皆さんに支えていただきながら、スタッフと楽しく仕事・勉強を続けていきたい、またわれわれの知識や技術、患者さんへの思いを少しでも治療に反映させていきたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。なお外来担当や紹介予約等については病院のホームページをご参照ください。

http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/hospital

# 横浜市立みなと赤十字病院

**松永　剛**

いきなりですがスタッフ紹介。

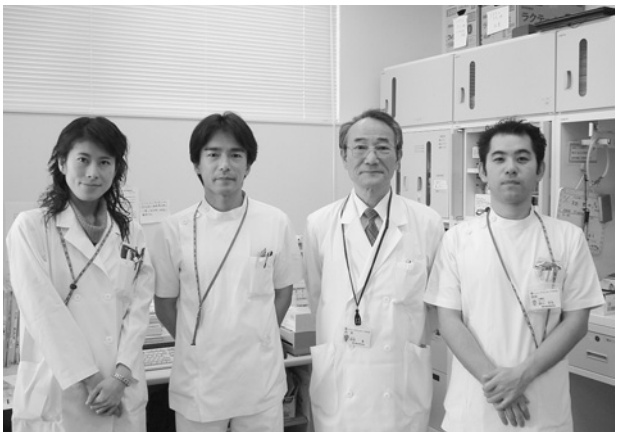
西岡清院長。東京医科歯科大学教授の定年まで１年のこし、大学病院院長の職から旧横浜赤十字病院院長に赴任。当院の開設に向け人集め、システム作りに奔走。病院の合併、医師を含めた多くのスタッフの退職、新規採用、電子カルテの導入などの困難を乗り越え、今日まで病院が存続しているのは院長の力量によるところが多い。その並々ならぬ情熱は、病院から徒歩３分、職員の中で最も病院に近い場所に居を構えていることからもうかがえる。教授在任後半にはずいぶん丸くなったと言う評判を耳にすることが多かったが、病院の会議の席で時折発する寸

鉄人をさす言葉は、教授として赴任された頃のままである。その熱意おそるべし！

盛山吉弘医師。平成11年、東京医科歯科大学卒業。筆者が医長として勤めていた茨城県土浦市の病院にローテーターとして２年勤務。大学に戻り将来を嘱望されていたが､筆者のたっての希望で当院に赴任。つまり西岡院長が親ガメなら筆者が子ガメ、盛山医師は孫ガメである。今年難なく皮膚科専門医を取得し、次は感染症専門医を目指すという勉強家。筆者同様、短躯であるが、内に秘めたエネルギーはK-1選手の魔裟斗なみである。そのパワーの矛先は診療のみに留まらず、赴任数ヶ月にして制覇した飲み屋は100軒に近づこうとしている。その肝機能おそるべし！

松永美帆医師。平成13年、東京医科歯科大学卒。盛山医師同様、土浦市の病院にローテーターとして赴任。そこで筆者と人生の墓場入りとなったが、そのいきさつはここでは述べない。夫婦での赴任は当初院内でも話題となり、２チャンネルでも取り上げられたようだが、面白みがないことがわかったのか今は放置されている。診療に関しては愕然とするほど知識がないと思うと、妙な勘が働くことがあり油断できない。盛山医師の専門医受験はまったく心配していなかったが、こちらは来年受験予定。筆者に恥をかかせないようお願いしたいものである。周囲の人間を不安にさせる楽天主義、おそるべし！

筆者。昭和63年、東京医科歯科大学卒業。関連病院勤務などを経て、平成８年から土浦市の中核的な病院に勤務。一応学位はアレルギー関連で戴いたが、今となってはもはや何でも屋。ただし器用貧乏の域を出ていない。西岡院長の教授退官記念業績集に各先生方が賛辞の文章を寄せる中、土浦島流しの恨みつらみを書いたため、憐れに思われたのか当地に呼んでいただき今日にいたっている。田舎では聞き分けの良いお年寄りを相手にすることが多かったが、横浜では病院慣れした患者さんが多いのでいささか閉口気味の毎日を送っている。


左より松永美帆、筆者、西岡清、盛山吉弘の各医師

こんな皮膚科医が集まり、医科歯科大学皮膚科としては初の横浜の関連病院で診療しています。他大学、他施設と協力、時に切磋琢磨しながら稀な疾患、難しい疾患にも果敢に挑戦、楽しく仕事をしたいと願っています。よろしくお願いします。

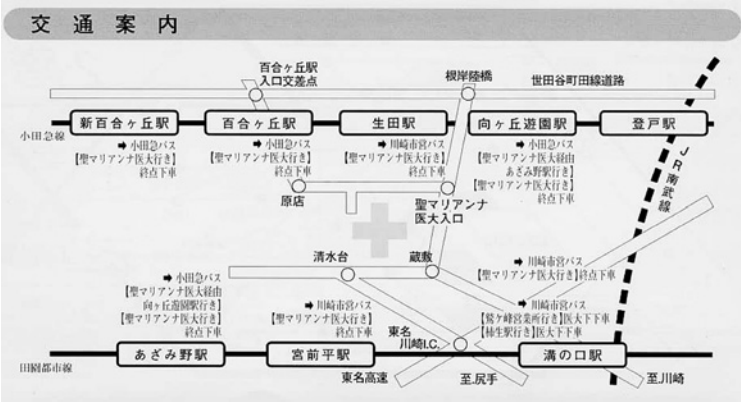
# 聖マリアンナ医科大学病院

川上民裕

## １．聖マリアンナ医科大学病院の概略

昭和46年に創立された東洋医科大学は、その後聖マリアンナ医科大学と改名し、今年で35周年を迎えました。当院は大学名からも明らかなように、キリスト教的人類愛に根ざした生命の尊厳を基調とした“医師の養成”と“愛ある医療”を目指しています。付属病院は本院、横浜市西部病院、東横病院と平成18年から川崎市より運営を委託された川崎市立多摩病院。これら４院をあわせると病床数は2300床を超え、高度先端医療とともに川崎・横浜両市を中心とした地域の基幹病院としても重要な役割を担っております。

聖マリアンナ医科大学病院の本院は、川崎市北部（宮前区菅生）にあります。病床数は1208床です。交通手段は、向ヶ丘遊園駅・百合ヶ丘駅・新百合ヶ丘駅（小田急線）、武蔵溝ノ口駅（JR南武線）、溝



聖マリアンナ医科大学本院への交通案内

の口駅（東急田園都市線）から聖マリアンナ医大行きバスで終点下車、あざみ野駅（東急田園都市線および横浜市営地下鉄）から向ヶ丘遊園駅行きバスで聖マリアンナ医大前下車です。また、本数は少ないですが、生田駅（小田急線）からでている聖マリアンナ医大行きの川崎市バスが、10分と最短で着きます。車なら、東名川崎インター下車左折後、尻手黒川道路から清水台交差点を右折し、長沢交差点を左折、２つめの信号を左折です。インターを降りてからだいたい10分位で着きます。

## ２．皮膚科学教室について

初代関建次郎先生、２代目溝口昌子先生に続き平成17年４月より相馬良直先生が主任教授に就任されました。医局の雰囲気は明るく、医局員総力をあげて診療・教育・研究を行っています。すべての皮膚疾患に対応すべく、医局員一同、努力しております。難解な症例については、毎週水曜日に開かれる臨床病理カンファレンスで討論のうえ、診断しかつ治療方針をたてています。また、特定機能病院の特徴を活かし、地域の先生方からの紹介患者様を積極的に受け入れています。

### ①診療体制

一般外来は午前中のみの受付です。土曜は第２・４・５週のみです。初診は基本的に講師以上が担当しています。再診はすべて予約制ですが、予約がなくても急患を含め、随時対応しています。午後は予約制の専門外来です。専門外来には、手術（月、火、木、金）、Ｑスイッチルビーレーザーによるレーザー外来（火）、アトピー性皮膚炎外来（水）、ピアス外来（水）、腫瘍外来（木）、乾癬外来（金）があります。また、narrow band UVBを含む紫外線療法、炭酸ガスレーザーは随時行っています。全身麻酔や大きな局麻手術は、入院のうえ中央手術室で行います。

### ②スタッフ・関連病院

聖マリアンナ医科大学本院の皮膚科スタッフは以下の如くです。

教授　　：相馬良直（水・金：初診）
主任医師・講師：川上民裕（月・火：初診）
医局長・助手　：南健（土：初診）
副医局長・助手：村上昇（木：初診）
以下助手：渡部秀憲（乾癬外来）、松岡晃弘（レーザー外来）、矢島健司（腫瘍外来）、川那部岳志（腫瘍外来）、木村聡子（乾癬外来）、芳賀恒夫（アトピー外来）、川崎奏（アトピー外来）、河瀬歩（レーザー外来）、神成摩耶（アトピー外来・ピアス外来）。

関連病院には以下のスタッフが出向しています。尚、平成17年をもって東横病院の皮膚科は閉鎖となりました。また平成18年３月で日本赤十字医療センターへの出向はなくなる予定です。

村上富美子（聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院）、久志本常人（川崎市立多摩病院）、高浜英人（町田市民病院）、上西香子（聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院）、山前恵美子（渡米中）、大岡志穂（たちばな台クリニック）、松永るり（川崎市立多摩病院）、保坂恵理（都立駒込病院）、堤祐子（日本赤十字医療センター）、齋藤千尋（聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院）。

以下の施設には、医局員を非常勤として派遣しています（神奈川県内のみ記載）。

日立戸塚総合病院、北小田原病院、湘南泉病院、富士通川崎病院、聖ヨゼフ病院、鶴川厚生病院、新中川病院、藤沢湘南台病院、横浜逓信病院、鶴巻

聖マリアンナ医科大学本院の全景

医局員一同：前列左より南健、川上民裕、相馬良直、久志本常人、２列目左より川崎奏、齋藤千尋、河瀬歩、神成摩耶、３列目左より木村聡子、村上昇、松岡晃弘、矢島健司、４列目左より渡部秀憲、芳賀恒夫、川那部岳志

温泉病院、鶴川サナトリウム病院、有馬病院、たちばな台クリニック、上白根病院、聖テレジア病院、にじのまち病院、総合川崎臨港病院、相模大野病院。

③研究

大学院生を含め医局員の多くは、研究に携わっており、忙しい日常診療の合間をぬって実験をしています。医学博士取得の学位審査の対象となる研究論文のほとんどは英文です。

主な研究内容は、以下のとおりです。

１）免疫・アレルギー・膠原病

アトピー性皮膚炎、強皮症、血管炎、ベーチェット病の病態と治療、および線維芽細胞、血管内皮細胞、好中球などとの関連を研究しています。直接臨床に結び付く皮膚症状を中心とした病態の把握と、診断に有意義な検査法の確立、効果ある治療法の開拓とその作用機序などをテーマとしています。

２）メラノサイト・メラノーマ細胞

メラノサイトや幼若なメラノサイト、メラノーマ細胞を用いてその分化や発生、増殖などの研究を行っています。幼若なメラノサイトから成熟メラノサイトへの分化過程の解明とそれに作用を及ぼすサイトカインなどの因子との関係、メラノサイトにおけるメラニンの産生機序と各分化段階での変化、悪性黒色腫における発癌や転移のメカニズムなどをテーマとし、悪性黒色腫の診断、治療への応用を試みています。

# 横浜南共済病院

岡澤ひろみ

横浜南共済病院は京急金沢八景駅と追浜駅の間の国道16号線沿い、追浜駅から徒歩７分のところにあります。かつてこのあたりは六浦まで入り江となっており、安藤広重が描いた『武州金沢八景』で有名な景勝地として知られていましたが、埋め立てにより今は面影がありません。

横浜南共済病院は、昭和14年に横須賀海軍共済病院追浜分院として現在地に創設されました。終戦と同時に海軍省が廃止されると、追浜共済病院と改称し、地域医療に貢献することになりました。「横浜南共済病院」と改称したのは昭和40年のことです。

昭和48年１月から平成９年３月まで皮膚科部長を務められた吉田貞夫先生は、現在は金沢八景駅近くに開業されています。その後任の川口とし子先生は６年半勤務されたのち京急能見台駅近くに開業されています。平成15年11月に部長心得として赴任した

外観

前列中央：高橋医師、後列左：岡澤

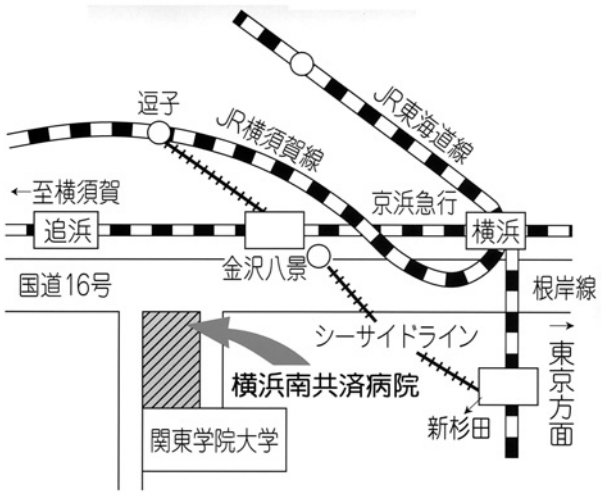
掛水夏恵先生は茅ヶ崎市立病院へ異動となり、平成17年４月からは筆者が担当しております。私は平成12年から２年間、ウンテンとして川口とし子部長の御指導を受けたことがあり、思い出のある病院に思いがけず戻ってくることになりました。今までの部長の先生方と同じようにというのは難しいかと思いますが、地域の基幹病院の皮膚科として恥じないレベルを目指して研鑽の毎日です。わからない症例があると大学の医局の先生などに教えを請いにうかがっています。このような時に大学に近い立地が非常に助かっています。

皮膚科は常勤２名で、ウンテンの高橋ユエ先生も平成17年４月からの勤務です。入局３年目の高橋先生は、外見は可憐でまだ学生のようですが、実はやんちゃ盛りの２児の母です。趣味は子育てだそうですが、仕事の上では大変頼りになる存在です。また月に１回、高橋先生の研究日に大学から松田麻里先生が応援にきてくださっています。松田先生も仕事と育児に奮闘中です。外来スタッフは他に看護師２名、クラークさん２名と全員女性で固めております。

午前の外来は予約制で平日は８時半から30分単位で13時までです。予約外は11時半まで受け付けています。火、水、金曜の午後は外来手術、検査、木曜午後は中央手術室での手術、月、水曜の15時半～16時半は学童外来（小、中、高校生対象）、月曜午後は光線治療などを行っています。土曜は予約と新患のみの受け付けとなっております。

南共済病院には形成外科、リウマチ科、心臓血管外科なども充実しており、また内科の先生方も入院患者さんの全身管理などの相談に快く応じてくれ、非常に助けられています。とても仕事のしやすい環境であると感じています。ただひとつの悩みは外来の狭さです。以前の皮膚科は他科からも羨ましがられる広々とした外来でしたが、平成15年４月オーダリング導入に伴い、中央採血室が形成・美容外科外来へ、形成・美容外科が皮膚科外来へ移動になった結果、皮膚科は待合室を仕切って作った狭いスペースに引っ越しになりました。２つの診察室は診察机と椅子が入るのがやっとで、処置室は診察台を１つ置くといっぱいです。午後には小手術、光線治療に使うこの唯一の診察台を、午前の外来診察中はフル稼動していますが、陰部の診察、ミズイボ取り、褥瘡の処置などが重なると、たちまちベッド待ちのカルテの山ができてしまいます。ここに採血や痛い処置で気持ち悪くなってしまった人を寝かせるとなるともう回らなくなってしまいます。もう１つ診察台を置けるよう、スペースを拡大するのが念願です。

これまでの部長の先生が築かれた地域の開業の先生方との信頼関係を大切にして、地域の医療に貢献していきたいと思います。ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。




所在地